

# 成熟と喪失——“母”の崩壊

一  
藤原  
千子

XIV

「父」の機軸が欠落しているのは『抱擁家族』の場合だけではないと、私は前にいった。不思議なことに、それは本来「父」の実在を立証しているはずのカソリック作家の作品からもねげおちているのである。

《うどん屋》で彼がそば湯をのみながら、結婚という言葉を言うと、このおむすびのような顔がじつと勝呂をみつめ、おむすびのような顔に涙が流れられた時、勝呂はこの女がやはり自分の妻だと思った。心臓が弱いので、はあ、はあ、息を切らして籠のなかに石炭と薪とを放りこんでいる。眼ぶたや頬がむくんで、髪に白い灰がついている。どこにでも転っている疲れた細君の顔だ。けれどもそれはやはり勝呂の作品にちがいかなかった。材料を集め、それをこねあわせ、いらだち、書いた勝呂の下手な小説と同じように、彼自身の人生の作品にちがいかなかった。そして、そのくたびれた顔のうしろに勝呂は妻と同じように、彼が本心から選んだのではないもう一つの顔を見つける。妻と同じように、彼が今日まで憎んだり嫌ったり、そして、

「君なんか……俺……本気で選んだんじゃないんだ。」  
幾度もそう罵った「あの男」の疲れきった顔を見つける。(同上)

『彼が「この男」を本気で選んだのではないんだと罵る時、その犬のように哀しそうな眼はじつと彼を見つめ、泪がその頬にゆっくりとながれる。それが「あの男」の顔だ。宗教画家たちが描いた「あの男」の立派な顔ではなく、勝呂だけが知っている、勝呂だけの「あの男」の顔だ。私は妻を棄てないように、あんたも棄てないだろ

う時の自分の気持ちを知っていない。あの時、死んだ母をみをついたことを知らない。自分は愛したから選んだのではなく、弱さのために女房としたのだといふことを妻は生涯、気がつかないだろう。

細君は次第に肥り、みにくくなつていった。それは彼をいらだたせる場合がある。勝呂は彼女と争つたことはあまりなかつたが、それは一人がたがいに満足していたためではなかつた。一度、ある冬の夜、赤ん坊の横で彼は彼女を撫り、言つてはならぬ言葉を口に出してしまつたことがある。

「君なんか……俺……本気で選んだんじゃないんだ。」

おむすびのような顔がじつと勝呂を見つめ、おむすびのような顔に涙がゆっくりと流れた。(選藤周作『私のもの』)(傍点引用者)

ここで選藤氏が「妻」と「母」を重ねあわせていることはいうまでもない。「勝呂の両親は憎みあって離婚したが、彼はこの肥つた体をもち、疲れを顔をして妻と一生、生活するだろう」というのは、主人公が「妻」のなかに「母」の影を見ているからにはほかない。しかし作者は、同時に「この妻の疲れを顔が……時として『あの男』の顔と重なる」という。「あの男」とはもぢろんイエスのことである。

ある夜、彼が彼女を撫り、口に出してはならぬ言葉を口に出しを時、おむすびのような顔がじつと勝呂をみつめ、おむすびのような顔に涙が流れられた時、勝呂はこの女がやはり自分の妻だと思った。心臓が弱いので、はあ、はあ、息を切らして籠のなかに石炭と薪とを放りこんでいる。眼ぶたや頬がむくんで、髪に白い灰がついている。どこにでも転っている疲れた細君の顔だ。けれどもそれはやはり勝呂の作品にちがいかなかった。材料を集め、それをこねあわせ、いらだち、書いた勝呂の下手な小説と同じように、彼自身の人生の作品にちがいかなかった。そして、そのくたびれた顔のうしろに勝呂は妻と同じように、彼が本心から選んだのではないもう一つの顔を見つける。妻と同じように、彼が今日まで憎んだり嫌ったり、そして、

う。私は妻をいじめてきたようにあなたもいじめてきた。今後も妻をいじめるようにあなたをいじめと云う自信は全くない。しかしながらを一生、棄てはせん。(同上)

この信仰告白に一種の感動がこもっていることを、私は否定しない。しかし私にはそれがどういう種類の感動なのかを判断することができない。私は主人公が「あの男」を棄てないことに感動するのであろうか。それとも彼が「妻」を棄てないことに感動するのであろうか。作者が問題にしているのは果して「あの男」なのか、それとも「妻」の上に投じられた「母」の影であろうか。ここで「あの男」と「妻」を結びつけていする「ように」という一語は、よく見るとときわめてあいまいに、その故にきわめて巧妙に用いられている。それは「あの男」を女性化し、同時に「妻」に一種の宗教的雰囲気をあたえて「母」に近づける。つまり「あの男」は「母」であり、したがってイエスは母性である。主人公がいおうとしているのは、むしろかつて父親が棄てた「母」を自分は決して棄てないということではないだろうか。

だとすればこの信仰告白は異端の信仰告白ではないか。つまりそれは「母」の擁護者、したがって「父」への復讐者のものではないであろうか。「父」は「母」を棄ててこれを破壊したが、自分はそのみじめな、「疲れた」母性を

決して棄てはしない。これはとりもなおさず「父」への反逆ではないか。それならこの信仰告白は実は正統的な信仰の破壊であり、主人公が信じるという「あの男」は実はイエスではなくてイエス以外の何者かではないか。

もしこれが聖母崇拜のかたちで語られる感情なら、それはエペソスの「マリアの二重教会」がアルテミスの神殿の裏山に建てられ、そのアルテミスが実はギリシア神話の狩獵を司る貴族な処女神ではなくて、おそらくアジア起源の無数の乳房を持つ豊饒の大地母神の姿をしているというような、比較文化論上の問題を提供するにどけるであらう（注1）。しかし渡辺氏はここで「あの男」そのものを女性化し、おそらく母性化している。そこに作用しているのは一般的な文化的の屈折を超えたある激しい個人的感情でなければならぬ。

「疲れて」「哀しそう」であるが故に嫌悪の対象であるが、同時に自分と一体化できる「あの男」の顔は、「沈黙」のなかにもあらわれる。それはボルトガルの司祭セバスチャン・ロドリゴがまさに背教しようとするときに、踏絨の中から彼を見上げるイエスの顔である。

今その踏絨に私も足をかけた。あの時、この足は凹んだあの人の顔の上にあつた。私が幾百回となく思い出した顔の上に。山中で、放浪の時、牢舎でそれを考えださぬことのなかった顔の上に。人間が生きている限り、善く

美しいものの顔の上に。そして生涯愛そうと思った者の顔の上に。その顔は今、踏絨の木のなかで磨滅し凹み、哀しそうな眼をしてこちらを向いている。（踏むがいい）と哀しそうな眼差しは私に言った。

この「善く美しいもの」、「生涯愛そうと思った者」、しかも捨てられて「哀し」む者のイメージを、裏切りられて哀しんでいる「母」のイメージと等しいものとすれば、ここで語られている感情はきわめて自然なものになる。「私は「母」を捨てた「父」について「母」を裏切り、そうすることによって「母」を破壊した。しかじとして汚された「母」は「私」をお救し、うけいれてくれなければならぬ。否、「母」を破壊すること自体が、「母」にうけいれられることでなければならぬ。そうでなければ「私」は決して救されず、救われもしないから。ここには「あの人」が男性であることを示すにものもない。いわんや「あの人」の背後に「父」を見ようとするどんな視線もありはしない。が、皮肉なことに、だからこそこの個所は切実であり、読者の脳髄をえぐるのである。その成熟の過程でからず人は「母」に拒まれ、あるいは「母」を拒んだといふ罪悪感にとらわれずにはいられないから。そしてこの罪悪感があるかぎり人はいつも「母」の救しを求めつづけるから。

このように考えれば、セバスチャン・ロドリゴといふホ

86

ルトガル風の名前をあたえられている「私」が、実はヨーロッパ人でもなければ「父」なる神の司祭でもないことは明瞭である。「私はつねに「母」を問題にして「父」をその世界から排除しようとしている。「父」が、「沈黙」させられていくのは、最後に「母」に「踏むがいい」という一語を発せさせるためである。つまり「沈黙」をつづける「父」は敗れ、「踏むがいい」といつて「私」を救す「母」が最後の勝利をおさめる。作者がこのことを明晰に意識して書いているかどうか私は知らない。しかし虚心に読めばこの小説で「父」が「沈黙」し、かつ敗れるためにのみ登場することは明らかである。「私」の「母」に対する切実な感情が聖母崇拜のかたちをとらないのは、彼のなかで「父」と「母」が和解しがたいかたちで対立し、相互に排除しあう関係におかれているからである。ヨーロッパで太古の大地母神信仰がキリスト教文化のなかに聖母崇拜としてよみがえったのは、「父」なる神と処女神とのあいだに和解が成立したからにはほかならない。あたかも古代の中国で、北方からもたらされた「天」の思想と、在来の農耕社会から生れた「道」の思想、つまり、

谷神ハ死セズ。是レヲ玄牝ト謂ウ。玄牝ノ門、是ヲ天地ノ根ト謂ウ。婦々トシテ存スルが若ク、之レヲ用ウルモ勤キズ。（老子）

というような母性原理が相対しながら補つていたよう

に、「父」なる神と聖母とはその信仰の起源を異にしながらひとつの文化のなかに融合し、和解しあつてゐた。しかし「私」の内面はこのような文化の型をそのまま受容することができない。彼にとって、「母」は「父」を称えこれを持続するものではあり得ないからである。しかも「私」は、設定によって「父」なる神への信仰に生きる者とされてゐる。彼が無意識のうちに求めるものが「母」による救しと「父」への復讐である以上、「私」に「あの人」を、つまりイエスを母性化する以外にどんな方法があるだろうか。

#### XIV章への注

注1 岸義一『西洋文化の源をたずねる』五五十六〇頁参照。

#### XV

私はロドリゴが「父」への反逆を企てる者だといた。それなら彼はアロテスタントに改宗した司祭であらうか。つまり彼は言義の原義における「抗議者」なのである。おそらくそうではない。エリック・エリクソンはその『若きルター』のなかで、マーティン・ルターのローマ教皇に対する反逆と父親ハンスに対する反抗が心理的に等価に置かれていたといつてゐる。ルターは、より高く強い「父」——つまり「父」なる神に直接結びつこうとするこによって、教堂や父親への服従を無意味化しようとした

87

というのである（注1）。

もしこのような心情がアロテスタントの「抗議」、あるいは「反逆」の根底にあるとすれば、それはより強いつ「父」を求めるようとすることであつても、決して「父」を排除して「母」につくことではあり得ない。実際アロテスタンティズムは、キリスト教から聖母を追放してしまつた